

「感染症と共生する知恵の蓄積を」

元文化庁長官・近藤誠一 2020.4.16 付け産経新聞より)

新型コロナウイルスは我々に、立ち止まって地球と文明について考える機会を与えてくれた。

地球は生態系の働きにより生命体を維持してきた。中心をなすのが食物連鎖と物質循環である。生物は環境に適合しつつ、種ごと適度な個体数を調整し食物連鎖に組み込まれることで相互に支え合い生命を保ってきた。生態系には均衡を維持しようとする力が働く。

また環境から植物に取り込まれた物質が食物連鎖で動物たちに移動し、やがて元の環境に戻ることで生命の循環が果たされてきた。ここで大きな役割を果たすのがウイルスなどの微生物である。単に腐敗や分解という機能によってだけではない。父親の遺伝形質をもつ哺乳類の胎児を母体の拒絶反応から守る役割も果たしている。

《制御できるとの思い込み》

他方20万年ほど前に生まれたホモ・サピエンスは、この地球世界と異なる独自の世界を創った。国家という概念を創り出し、また農業革命によって食料の増産を可能にして富の増大をもたらした。

人類はこの世界で政治（権力闘争）と経済（成長）に没入してきた。科学技術は自然に介入し、食料やエネルギーの増産、高度な道具の生産をもたらした。自己に都合のよい動植物を栽培・飼育し、他は乱獲した。物質循環に馴染（なじ）まぬ化学製品を廃棄した。こうして人類は人口を急増させ、生態系の枠を脱したかに見えた。

しかしその活動は産業革命を契機に自然に負荷をかけ始めた。多くの種が絶滅し熱帯林が失われ温暖化が進展した。人類はそれを放置してきた。科学技術は何でも解決できるという過信の故である。

それによって微妙なバランスを崩された生態系の反応の一つが温暖化であり、もう一つが感染症なのだ。一地域の風土病にすぎない感染症は破壊的なパンデミックに発展して人類を頻繁に苦しめた。ウイルスは超短期の間に世代交代と変異を遂げ環境変化に耐える個体をつくる能力により、科学の力をかいくぐって生き抜いてきた。実は皮肉なことに文明がそのウイルスを助長してきたのだ。

《日本的な発想の強みを》

森林伐採により野生動物が人里に追い出され病気を人に移し、彼らを天敵とするネズミが数を増やして病原体をまき散らした。都市化は、ウイルスの増殖にとって極めて好都合な人口密集空間をつくった。文明はウイルスを撃退するどころか、彼らが活動しやすい環境をつくったのだ。

生態系の維持の陰の主役であり生命体の存続に不可欠なパートナーであるウイルスと真っ向から戦うことは得策ではない。賢く共生していく他はない。それには第一に生態系へ

の負荷を軽減し、ウイルスの出番を減らすことだ。文明をリードしてきた西欧は、宇宙には実体が普遍的に存在すると考え、物事を二項対立で捉えてきた。そこから自然を機械と考へて人間と対峙（たいじ）させるデカルトの思想、自然の支配を唱えるバークの思想が生まれた。自然は自由に消費できる資源なのだ。

他方日本人は、自然は生命によって自律的に存在し、人間もその一部と考える。宇宙は循環していて普遍の実体はなく、二元論では割り切れないと考える。この発想は湯川秀樹博士の「中間子論」や、南部陽一郎博士の「自発的対称性の破れ」理論を生み、ノーベル賞につながった。

この思想は日常生活を自然の中で営み他を排除せず共存していくことが全体のためになるという、生態系と波長のあう発想である。

≪「ねじ伏せる」で解決しない≫

人類がこの思想の上に立つことで、生態系への過度な負荷による温暖化や感染症の爆発的流行を和らげることができる。**感染症が発生しても生態系によるバランス回復機能ととらえて、その程度に合わせて日常生活の中で対策を実行することができる。地震や台風対策同様、自然の摂理と経済や文化などの日常生活の継続との微妙なバランスをとりながら、感染症と共生していく知恵が蓄積される。**

第二に、人類は自らの文明をうまく管理しなければならない。戦後の世界秩序を構築した合理主義文明は、個人の自由と物質的豊かさの偏重を進めた結果、ポピュリズムや社会の分裂を招いている。そうした中で今回の各国の感染防止への対応は国家間の相互不信と分裂を加速し、経済の混乱や社会不安を招いている。さらに現代人の心に潜む利己主義、人種差別、排除の論理が表面化し、ネット空間で拡大した。共通の危機を、自動的に違いを超えた国際協力の再構築につなげるほど文明は偉大ではなく、人類は賢くないことが露呈した。

パニックが核兵器やサイバー兵器の誤作動の引き金にならぬよう国際協調体制とそのための信頼の回復に向けた意識改革が急務だ。

文明の力で感染症をねじ伏せようとするだけでは問題は解決しない。戦いはエスカレートし、パニックが人類を自滅に追い込むだけだ。文明や人類への過信を反省しウイルスと共生する知恵を蓄積することこそが賢い道なのだ。

（こんどう せいいち）